

かけはし

教育学研究科
静岡大学 教職大学院
NEWSLETTER

No. 3

2016年12月1日

静岡大学教育学研究科・教職大学院 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 TEL 054-258-4701(山口研) URL <http://www.dapse.ed.shizuoka.ac.jp/>

巻頭言

教職大学院に期待すること

山田 幸男

(富士市教育委員会 教育長)

富士市では、平成19年度より静岡大学と学校訪問指導業務委託を結び、広い視野、また専門的見地から学校運営や教育活動に指導助言をいただき、授業改善等に大きな成果を上げてきている。昨年度は、講師人数30人(延べ59人)で35校を訪問いただいた。いわゆる理論と実践の往還が日常的に行われているものと思っている。このように本市と静岡大学との縁は浅からぬものがある。

このような経緯もあり、私は静岡大学教職大学院に期待するところ大である。「現場の実態に即した研究を指導してくれるので、学校としても応援しやすい。」「これまで何となく行ってきたことの理論化が図れ、柱ができた感じがする。」等、総じて高評価であるのはうれしいことである。

中教審教育課程部会の「審議のまとめ」では、現状を次のように分析している。少し長いが引用すると、「グローバル化は我々の社会に多様化をもたらし、また急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、子供たちの成長を支える教育の在り方も新たな事態に直面していることは明らかである。」と述べられている。私もまさにこの通りであると思うが、何よりもますます教師の力量が問われ、教員の資質向上が急務である。その資質向上のための一丁目一番地としての教職大学院の重要性は言を待たない。

さて、静岡大学教職大学院には、学校や教員の要請

に応え、いわばハブ的機能を果たして欲しいと強く願い、また期待している。研究者教員と実務家教員との協働はどのようになっているかは私には分からないが、理論偏重ではなく、また感覚、勘だけの実践ではなく、総合的なバランスをとっていただけるとありがたい。実践が理論を生み、理論が実践を生むような指導をと、外野からは勝手な思いを抱いている。

ところで、教職大学院の一層の発展、充実のためには市教育委員会レベルとしては何ができるのであろうか。期待ばかりしては、この制度の充実・発展は望めない。両者がまさに「かけはし」を意識することが肝要であろう。市教育委員会としては、私は次のようなことを心がけていきたいと常々思っている。

- ・ 学校にとっては痛手かもしれないが、将来のスクールリーダーや各地区のリーダーとして期待できる人材を継続して送る。
- ・ 研修生の研究を様々な機会を活用して広めていく。
- ・ 研修生の将来については活躍の場を保証していく。
- ・ 教職大学院の役割やそこで学ぶことの意義等について、研修生を活用してアナウンスする。

大学、県教委、市教委、学校現場が連携していくことは簡単なことではない。それぞれに背景となる文化も違う。おまけに義務教育の制度は複雑である。しかし、それらを乗り越えて、それぞれのポジションでできることを精一杯していくことが重要であろう。

以上、教職大学院に期待することを、現職教員を送り出す立場から述べさせていただいた。



これからの学びに求められるアクティブ・ラーニング

教育方法開発領域 M1 臼井秀明 加納慶士 杉山貴志 戸田宇海

<アクティブ・ラーニングとは>

アクティブ・ラーニング（以下、AL）が次期学習指導要領のキーワードとして注目されています。平成28年8月に中央教育審議会から「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が示されました。ここでは、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点から、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すとしています。ALは、知識基盤社会を主体的に生きていく子どもたちにとって、必要な資質・能力を育成するための授業改善の視点として示されています。AL型授業としては、問題解決学習、調査学習、ワークショップ型授業、知識構成型ジグソー法、反転学習などがあり、すでに多くの学校で授業実践が進められています。しかし、このような特定の「型」にはめ込むのではなく、子どもにとって「どのように学ばば、深い学びが生まれるのか」という視点を重視した不断の授業改善が求められています。

<大学院での学びを通して>

大学院では、次期学習指導要領がどのような学びを目指しているのか、学習科学の視点からの望ましいALとは何かといったことを学んでいます。授業では、主課題に迫るために教師から下位課題（小発問）が順番に提示され、その順番で理解を深めていくという授業（後向きアプローチ）から、本時の主課題から解決すべき下位課題を児童生徒が設定し、各自なりに深め、さらに次の学びへとつながっていくという授業（前向きアプローチ）へ変更していくことが重要であるということを学びました。

また、静岡県総合教育センターで行われた「次期学習指導要領対応授業力向上研修（高・特）」では、静岡大学の益川弘如准教授による「育成すべき資質・能力とアクティブ・ラーニング」の講演が行われ、学習指導要領の改訂の意図や方向性、大学入試制度改革の流れ等を学びました。その後、参加した先生方が各自持ち寄った「主体的・対話的で深い学び」を志向した授業案を、参加者同士で評価・検討・改善していくワークショップが行われました。今後、このように教員同士で授業改善をしていくコミュニティの活性化が求められています。

<ALを意識した授業実践>

小学校6年生社会科の授業についての実践を紹介します。単元は「鎖国ってなんだろう」（鎖国観を問い直す）です。江戸幕府の政策の柱である「鎖国」ですが、

近年の研究で「鎖国」の捉え方が変わってきています。しかし、子供たちが学習した後の「鎖国」に対する知識は、実践者である私が小学校で学んだ知識と変わらないという実態が多く見受けられたため、それを問い直すと考え、単元開発をしました。この単元で設定したALは、各自が調べてきた「4つの口」（出島・対馬藩・薩摩藩・松前藩）での交易の内容を基に、幕府が「鎖国」を行った『隠れた狙い』について話し合うことを通して、「鎖国」について深く学ぶというものです。この学習を行うにあたって私がポイントと考えたのは、①「地域につながりのある教材」②「どのような資料を活用するか」でした。どちらも子供たちが主体的に学ぶための動機付けとして欠かせない内容であると私が考えたからです。特に資料については、小学校6年生という実態に合ったものを探すため、教材研究の大半をさくこととなりました。授業では、まず、自分たちが調べた内容を発表したり質問したりすることを通して、「4つの口」に共通している幕府の対応や考えをとらえます。更に、オランダ商館長の江戸参府について描かれた絵を読み取って考えたことを加え、グループで、幕府の『隠れた狙い』について話し合い、学級全体で考えを統合していくという流れでした。子供たちは、調べてきたことを基に考えた意見と、新たに出会った資料で考えたことを基に、「新しい鎖国観」をつくっていくことができました。



（中央教育審議会『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ』（2016）より引用）



修了生奮闘記

沼津市立静浦小中一貫学校 教諭 土屋崇範
4期生 (H24~H25年度) 生徒指導支援領域

「一步引いて全体や個を俯瞰することによって支援の手立てが見えてくる」これが、教職大学院での学びであったと実感しています。

約3年前に、新設された小中一貫学校に赴任しました。1年生から9年生までの幅広い年代の子どもたちへの指導方針が定まらないとき、教材研究やテストづくりなど忙しさを自分を見失いそうなきときなど、「一步引いてみてみよう」という言葉が聞こえてきます。すると、新たな手立てや関わり方が見えてくるのです。

理論に裏打ちされた大学の先生方の様々な視点、実践経験豊かな同僚の先生方との議論、現場で悪戦苦闘する実習先の先生方の姿…。これら大学院での学びが財産となり、現在の私の大きな支えになっています。現在、静浦小中一貫学校の生徒指導部長として、「子どもたちが安心して学べる学校づくり」を追求している最中です。立ち位置を変えてみることで、「協働と連携」の大きな効果が見えてきました。同僚の先生方とともに、「学ぶ喜び」あふれる学校をめざしていきたいと思っています。

静岡県立藤枝東高等学校 教諭 野村真澄
5期生 (H25~H26年度) 学校組織開発領域

教職大学院修了後、私は母校に勤務することになりました。自分の高校時代と何ら変わっていない学校の雰囲気に出会う度に懐かしさと安心感を覚えます。しかし、今後の高等学校の教育現場は大きく変わってきます。何故なら、平成27年に文部科学省が「高大接続改革実行プラン」を策定し、各大学の個別選抜の改革や「高等学校基礎学力テスト」および「大学入学希望者学力評価テスト」の実施、高等学校教育の改革、大学教育の改革を具体的な施策としているからです。

教職大学院では日々の教育活動に専心するだけでなく、大局的な視点を持って時代の趨勢を見据えることや改革の背景を十分に把握することの重要性を強く認識できました。また、アクティブ・ラーニングや組織論などの知見を広めることもでき、教師として学び続けていく意義を実感しました。教職大学院での経験を生かして、これからの高等学校教育の改革の本質を理解し、目の前にいる子どもが予測不能な変化をし続けていく社会に柔軟に対応して貢献していく人材となるよう教育に携わっていきたくて考えています。

学びの宝石箱

教育方法開発領域 M1 工藤麻耶

ミニアクションリサーチで、小学校5年生の児童を対象に図画工作科「明かりをつけたら ミラクル行灯」の授業を行いました。絵を描いた行灯の裏から色紙を貼り、行灯を円柱状に組み立て、内側から明かりを灯すと、それまで見えなかった色紙の色や模様が現れます。今回は学習を通して意欲を持続させるために、完成した行灯を自分の家の中に飾ることを目標としました。また、思いを豊かに表すための手立てとして、様々な色紙を用意し、試す時間や交流の場を設けました。紙の違いによる光の透け具合を試し最も合う紙を選んだり、色紙をずらして貼ったりして自分の思いに合った行灯を工夫する姿が見られました。

今回は地域素材を生かした授業を行いました。今回は生活や社会につながる授業だけでなく、教科連携授業にも焦点をあてて研究を進め、自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成につなげていきたいと思っています。



教育方法開発領域 M1 鈴木美智

教育方法開発領域では、ミニアクションリサーチでの授業研究を可能な限り院生同士で公開し、意見交換や授業分析を行っています。事前に授業者が単元開発を基盤とした原案を提示し、それをもとにして学習内容や指導方法等を検討していきます。

11月には、静岡市内の小学校において社会科の中心授業が行われ、領域の院生全員が授業に参加しました。授業後は、前期に学んだ学習理論や分析方法を踏まえ、今回の授業での記録からグループ活動や全体学習での子供同士の会話や教師のかかわり方を中心に、時間をかけて発話分析や考察等を行いました。

また、附属学校園をはじめ、県内外の先進校を視察し、最新の情報を取得する視察実習も行っています。

院生同士様々な情報を交換し合い、来年度のアクション・リサーチに向けた研究を各自進めています。



お勧めします ブックレビュー

理解をもたらすカリキュラム設計 UNDERSTANDING by DESINE

G. ウィギンズ/J. マクタイ著 西岡加名恵訳

日本標準 2012



学校現場において、「理解」という言葉
を簡単に使っていることが非常に多い。しかし、子どもが「本当に理解した」とはどういう状態なのだろうか？と問われると答えに困る。この本では「理解」を6つの側面からとらえ、深く考察している。そして、その「理解」を目標として、逆向きにカリキュラム

を設計できるように指南してくれる。

現在、新学習指導要領の検討がされている最中であるが、一人一人の教師が、そこで求められている「理解」についてしっかりと考え、カリキュラムを見直す必要があるのではないだろうか？その際、この本が一つの支えとなってくれるであろう。

(教育方法開発領域 M1 服部)

「アクティブ・ラーニング」を考える

教育課程研究会

東洋館出版社 2016



次期学習指導要領改訂における授業改善の視点を表すキーワード、「アクティブ・ラーニング」。では、「アクティブ・ラーニング」とは何をすればよいのか。どのような授業改善の視点なのか。

児童・生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するには何が大切なのか。本書では、文部科学省教科調査官を中心として「アクティブ・ラーニング」とは何か、「アクティブ・ラーニングと各教科の関係」等を次期学習指導要領改訂の方向性を踏まえながら解説している。本書を読むことによって「アクティブ・ラーニング」の概要が掴めるとともに、授業改善の視点が見える。「アクティブ・ラーニング」について学べる、必読の1冊。

(教育方法開発領域 M1 村松)

<教職大学院からお知らせ>

「静岡大学教育学研究科教育実践高度化専攻 平成 28 年度 公開成果発表会」開催のご案内

日 時：2017年3月4日(土) 9時45分受付開始 10時15分～15時40分(予定)

場 所：静岡大学教育学部附属静岡中学校(静岡市葵区駿府町1番86号)

* 申し込み及び詳しい情報については、下記のホームページにて随時お知らせいたします。

静岡大学教職大学院ホームページ：<http://dapse.ed.shizuoka.ac.jp/>

現代的教育課題の解決を意識しつつ、各大学院生の興味・関心・課題に基づいて追及した現場型実践研究(アクションリサーチ)の成果を報告するとともに、理論と実践の融合を目指した教職大学院の2年間の学修の成果を今後の各地域の学校改善へどうつなげたいかを発表します。ぜひ足をお運びください。

| | | | |
|--|-----------|-------|--|
| 発行責任者 | 専攻長 | 山崎 保寿 | 編集後記 現場を離れて大学院で学ぶようになり、早いことに半年が過ぎました。たくさんの仲間と出会い、多くの先生方にお世話になりながら、秋の深まりとともに学びもまた深まってくのを日々実感する毎日です。自分の実践知とここで学んだ理論が多くの授業でつながるようになったことで、その都度立ち止まって自分の解決すべき課題に向き合うようになりました。後期に入り、各自アクション・リサーチの実習計画の立案に入っています。大学での学びの成果を最大限に現場に還元できる自分を目指し、答えなき問いにも真摯に向き合い、不断の考察の中にさらなる学びの深まりを見い出せるよう今後も努めていきたいと思えます。(石川) |
| 監修 | 担当教員 | 山口 久芳 | |
| 顧問 | M2 代表 | 松岡 龍吾 | |
| 編集長 | M1 | 伊藤 智美 | |
| 副編集長 | M1 | 臼井 秀明 | |
| | M1 | 深谷 陽平 | |
| | ストレートマスター | 芦澤 優樹 | |
| | ストレートマスター | 萩原 万葉 | |
| 発行担当領域(教育方法開発領域) 石川 史江 加納 慶士 工藤 麻耶 杉山 貴志 鈴木 美智 戸田 宇海 服部 圭吾 村松 義之 渡野 広貴 | | | |

題字 ストレートマスター 北住 美來

次号発行担当領域は 生徒指導支援領域です

